

翻訳 ディヒター・トーマス著マイクロファイナンス再考：経済史における信用貸し付けと成長の順序（岡本恵也教授 退職記念号）

著者	?藤 瑠璃子, ディヒター トーマス
雑誌名	熊本学園大学経済論集
巻	22
号	3-4
ページ	367-389
発行年	2016-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00003004/

翻訳 ディヒター・トーマス著 マイクロファイナンス再考 — 経済史における信用貸し付けと成長の順序¹⁾ —

頼 藤 瑠璃子

要 旨

マイクロファイナンス、すなわち世界の貧困層への小規模貸付のような金融サービスの提供は過去 10 年間で成長し、数千万人の人々へ何十億ドルという信用を提供するまでになった。マイクロファイナンス活動の主な目的は、マイクロ事業への投資に対する資金の提供にある。それによって、人々の貧困からの脱却と経済成長の促進を目指している。

しかし、近年の事例や先進国の経済史からは、これらの説明が現実性のあるものとは考えられない。貧しかろうとそうでなかろうと大半の人々は起業家ではなく、従って一般的に大衆への融資が、実現可能な事業のスタートアップを導きうると考える根拠はほとんど存在しない。今日に至るまで、先進国における事業の立ち上げは圧倒的に貯蓄とインフォーマルな借り入れから成り立っており、過去マイクロクレジットは小規模事業に重要な役割を果たすどころか、実際その多くは投資よりも消費に使われている。さらに先進国の例を紐解くと、大衆への貸し付けは経済発展の後にやってくるもので、今も昔も融資とは、投資ではなく消費のために存在するものである。

成長と大衆への貸付の順番と本質が、過去と現在で構造的に異なると信じる理由は見当たらない。マイクロファイナンスが成長や事業の大成功に大きく貢献しうると期待すべきではないのである。

導入

マイクロクレジット、すなわち極貧層への小規模貸付は過去 10 年間で急速に拡大し、世界

1) 本稿は、2007 年に DichterT がケイトー研究所に掲載した“A Second Look at Microfinance –The Sequence of Growth and Credit in Economic History–”を、ケイトー研究所の許可の下、頼藤瑠璃子が翻訳したものである。許可を下さった研究所にここで感謝と敬意の念を表したい。© 2007 cato Institute Development Briefing Paper Series. Used by Permission.

中の数千万の個人に数十億の融資を提供するに至った²⁾。マイクロクレジット活動のごく初期の段階から、貧困層が特に、高利ではないフォーマルな金融へのアクセスを欠いているという仮定が存在しており、一部のレトリックでは、貧困層はクレジットへのアクセスから意図的に排除されているという主張も未だに行われている。

その回答が、全ての人々に融資へのアクセスを提供するという、「金融の民主化」であった。これらのアクセスは、マイクロ事業や資産購入への投資を通じて貧困層が困窮状態から抜け出す事を可能にすると考えられている。そしてそれは回りまわって、経済発展につながるのだ。過去 15 年間のマイクロファイナンスに関する大半の記事（もしくは近年のマイクロファイナンス関連のウェブサイト）は、以下のような概念によって強化されている。

「私がウガンダとグアテマラで出会った女性達は、非常に機略に富んでいて、その勇気と勤勉さをもって、いかに彼女たちがこんな少額から小規模事業を興すことができたのか、驚くばかりである。³⁾」

「銀行は、(わずか) 25 米ドルの融資を提供した。事業を興すためには、このような僅かな額は笑い物にしかならないように見える。しかし、これは冗談ではなく、貧困地域において起業家となるために設計された“マイクロクレジット”なのだ。⁴⁾」

2) マイクロファイナンス (MF) は、マイクロクレジットを名乗ることから始めた運動の最近の、より包括的な名前である。信用貸付は未だに MF の名の下提供されるサービスの最も大きな部分であるが、その新しい名前はマイクロクレジットが現在貯蓄や保険、送金を促進していることを表すためにつけられた。マイクロファイナンス機関 (MFI) は銀行や非政府組織、金融業者のようなノンバンク金融組織、信用組合のような生活協同組合などになることがある。MF の拡張された定義と組織の幅広さのため、業界の規模を正確に把握することは困難である。マイクロクレジットを世界中に広めるという使命を持ったマイクロクレジットサミットキャンペーンのような組織は、MF が 1 億近くの貧困世帯に提供されたと主張する。Microfinance Information Exchange (MIX) <http://mixmarket.org> は世界にはおよそ 3,000 万のマイクロクレジット利用者がいると推定している。現時点において 818 の MFIs が MIX に登録しており、2005 年の終わりには 488 の報告されたデータのうち活動中のメンバーが 10 万人以下である組織は 92% を占めていた。同じ 488 の中で、5 つの組織（その内 4 つはバングラデッシュ）だけが 100 万人以上の顧客がいると報告した。

3) ナタリー・ポートマンは女優で国際マイクロクレジット年のスポンサーでもある。

http://www.yearofmicrocredit.org/pages/whosinvolved/whosinvolved_patronsgroup_portman.asp

4) Larry Baum, “The Year of Microcredit,” *Human News*, September 29, 2005, <http://ideaexplore.net/news/050929.html>.

「マイクロクレジットプログラムは世界中の沢山の国々で人々を貧困から引き上げ続けることに成功している。⁵⁾」

マイクロクレジットサミットキャンペーンの使命は、次のとおりである。

「1億7,500万の世界の貧困世帯、中でも女性世帯員が、経済的かつ事業のために必要なサービスを受けとり、自己雇用のための融資を獲得している状況を2015年までに確立するために尽力することである。⁶⁾」

「融資と返済サービスがいかに、何百万という人々に貧困から脱却するための労働をエンパワーしてきたか、我々は見えてきた…マイクロファイナンスは貧困と闘うための力ある道具である。貧困世帯は金融サービスを利用することで、所得を向上させ、資産を構築し、いざというときの緊急の支出に備えるのだ。⁷⁾」

さらに、2006年のノーベル賞受賞者であり、グラミンバンクの創設者であるムハマド・ユヌスが、融資を人権だと呼んでいることは有名である⁸⁾。

しかしマイクロクレジットの実務家（この論文の著者も含む）は、資金が代替可能なもので、融資以外の何物にも使えることを学んできた。それは机上の空論に過ぎないと考えられてきたが、貧しい借り手達はローンを高額商品の購入や緊急時の対応といったありとあらゆる資金の流れを解決する「支出の平準化」と呼ばれるようになった産業に用いていることは真実となりつつある。しかし、まさしくこの言葉は、マイクロファイナンス活動が全て、単純明快な「消費」という概念を思うほど容易にこなしていないことを意味する。なぜなら、貧しい人々に対する財とサービスのための融資が本来（それが薬や教育といった必要なものとしても）、マイクロファイナンスが始めようとしたものではないことは暗黙のうちに認識されているからである。

5) United nations Department of Economic and Social Affairs, <http://www.un.org/esa/>.

6) <http://microcreditsummit.org>

7) Brigit Helms, *Access for All, Building Inclusive Financial Systems* (Washington: Consultative Group to Assist the Poor, World Bank, 2006), pp. ix, xi.

8) 彼はこの発言を1980年代から何度も行ってきた。最近では、Muhammad Yunus, "What is Microcredit?" August 2006, [http://www.grameen-info.org/bank/Whatis Microcredit.html](http://www.grameen-info.org/bank/Whatis%20Microcredit.html) がある。

マイクロファイナンスの分野で働いてきた、または働く我々の中には事実、我々の仕事に根拠を与える証拠の数々の周りで用心深く足踏みしている者もいる。我々は、次の質問を避けて通り、そして婉曲語句を長々と話しがちなのである。すなわち、貧しい人々は本当に、「マイクロ起業」や「起業家精神」や「所得創出活動」といった言葉で表されるような事業に融資を用いているかどうかという問いである。

歴史、すなわち、「北側」諸国の事業投資や消費における融資の使い道の歴史は、それがフォーマルであれインフォーマルであれ、「すべての人に融資を」というマイクロファイナンスの考えについて示唆に富んでいる。それらは、我々のマイクロファイナンスに関する説明をより現実に即したものにしてくれる。例えば、富める国の経済史は次の点を強く主張する。

- ・マイクロクレジットの初期の形態は事業立ち上げや小規模事業の発展にはまったく重要な役割を担わなかった
- ・金融サービスの民主化における最初の努力は主にほとんどが貯蓄や「節約」をベースとする
- ・事実、経済発展は金融サービスの民主化に先立つか、よくても同時並行であった
- ・貧困層のための融資が本当にやってくるとき、それは貯蓄活動に伴うものであり、またもっぱら消費に関連して発展する

もしこれらの教訓が根拠のあるものだとしたら、マイクロクレジット、すなわちマイクロファイナンスの中でも未だに割合の多いサービスは、遥か昔から、数多くの実践者や賛同者が期待するような結果を導いてこなかったように見える。

ここでは、貧しい人々が起業家であるという仮定については取り扱わない。起業家的性格の分布は世界の全ての場所において極めて同様である。ある人々は持ち、ある人々は持たない。発展途上国の貧しい人々は初期の事業家である、と多くの人々が考えるのは驚くことではないが、まったくのところ、貧しい人々は少額の現金を生みだすためにインフォーマルな市場に頼らざるを得ないし、事業に従事しているように見えるものはある種の初期状況的生存活動であり、我々の呼ぶ「真の」ビジネスではないのである。もし他の全ての要素が等しいのであれば、西側諸国と同様に限られた人物たちのみが起業家としてキャリアを積むさまを目にするだろう。

それよりむしろこの研究は、融資へのアクセスの歴史に関する調査を意味しており、また18世紀後半の始めから20世紀中盤にかけて続いた先進工業国の発展における融資の使い方も対象としている。特に、北米やイギリス、そしてドイツの経験に着目する。研究と書籍の数は膨

大であるが、日本や他のヨーロッパを「発展した」と見なして、それらの国々の経験を付け加えることもできるだろう。

貧しい人々は資産を持っているか？持っているならそれらをどう管理しているか？

「融資を全ての人の手に」という考えは、「貧困層は資産構築のために融資を必要としている」という信念を一部土台としているため、我々はまずクライアント、すなわち貧困層自身を見つける必要がある。過去において、貧しい人々は資産を欠いていたが、それは現在においてもあてはまるのか。この問題は複雑である。

まず、貧困層の資産の多くは、特に農村部において、搾取や没収を避けるためにしばしば意図的に隠される。19世紀以降の小作人の生活に関する記述や小説からは、近所や地元の支配者、または税の徴収者から保有資産や生産物を隠すための彼らの能力を知ることができる。家屋が窓の数によって課税されるようになったとき、人々は道路から見えないように設計された窓の付いた家を建てた。16世紀アルプスに住んでいた農民たちが放牧地の賃料を牛乳で支払っていたとき、最初に全ての量を絞ってしまわず、後から、もしくは夜間に残りを搾乳していた。そうして作られたのがルブションチーズである。インドや中国、ロシアやアメリカの農村でも同様に、比較的貧しい人々は彼らの資産を過小に見積もったり隠したりする方法を見つけていた（あるいは見つける）のである。

この理解可能な伝統はむしろマイクロファイナンスの課題の利他的な面によく合致する。それは、貧しい人々は資産を持たない、という信念を強化するもので、貧困に関する研究の大半はこの信念をまったく変えていない。マイクロファイナンスプロジェクトの設置に先んじて我々が貧困層の調査を行うとき、調査は（時間や予算の制約、そしておそらくイデオロギーのため）たいいてい、時間が全く足りておらず、また表面的すぎるため、貧困層が調査者に伝えたいと欲する回答のその奥深くにまで至っていない。長期に亘るフィールドワーク（対象村に二年かそれ以上居住することが求められるであろう民俗学的な種類のもの）のみが、貧困層がどのようにして資金やその他の資産を作り、守り、使用しているか、その複雑さの向こうへの到達を我々に許すのである⁹⁾。

9) エルナンド・デ・ソトは、貧困層の資産は富裕層の採る手段と同じ形で表されるわけではない、という重要な指摘を行った。Hernando de Soto, *The Mystery of Capital: Why Capitalism Triumphs in the West and Fails Everywhere Else* (New York: Basic Books, 2000) 参照。

もちろん、貧困層がしばしば資産を隠すという事実が、彼らが裕福であることを意味するわけではない。確かに、彼らはその貧しさや頻繁な借金、搾取からの脆弱性を理由に、しばしば資産を隠す（拡大解釈すれば「守る」）。そして貧困は彼らの行動のある部分を、ずるくて、保守的な生存主義者へと形作るのである。なぜなら彼らは難局や定期的な欠乏、そしてもちろん死や税金といった様々な出来事に対処するための無数の手段を見つけ出さなくてはならない状況に置かれているのだ。今日のマイクロファイナンスは貧困層を上立場から一つの側面のみを用いて観察してしまいがちである。すなわち、貧困層は腹を空かした生き物であると同時に沢山の可能性を秘めていて、そして確実に弾力性が不足しており、選択肢や戦略を欠いている、という見方である。それどころか、農村の貧困層は都市部の貧困層より幾分単純に捉えられている。しかし、物事は常に見た目通りではない¹⁰⁾。

先進国における貧困層が公的かつ広範な融資へのアクセスを手にし始めたとき、それは実は消費のためのものであり、そして確かなことに、融資への幅広い可触性は消費財の供給というよりはむしろそれらの需要によって導かれた。事業の発展に関してはというと、フォーマルな融資の取り込みは貧困層（事業を始めたいと考えたとき貯蓄及び友人や家族からのインフォーマルな借金を用いる人々）によるアクセスではなく、むしろ大規模な事業の設立によるものであった。事業を目的としたフォーマルな融資はそれが到達可能なものであろうとなかろうと、貧困層ではなく、我々がこれから見るように、しばしば大規模事業主自身の選択によるものである。

過去における事業を目的とした融資の利用

歴史的に見て、伝統的なバザー経済における商人や業者から、後期の「企業」経済における小規模事業従事者に至るまで、融資の使われ様は今日のマイクロファイナンスの仲間内で考えられているものよりも複雑である。過去においても、そしてしばしば現在においても、実際の事業のための融資は、社会構造や文化、直感ではわかるべくも思えるような「ルール」と複雑に絡まり合ってきた。数多くの歴史家や経済学者、社会学者が示してきたように、融資に対する実際の起業家たちの考え方は最近のマイクロファイナンスの枠組みの持つ「起業融

10) 小作人の生活の複雑さに関しては、例えばソビエトの農業経済学者アレクサンダー・チャーノフの *The Theory of Peasant Economy*, ed. by D. Thorner, Basil Kerblay, and R. E. F. Smith (Madison: University of Wisconsin Press, 1986) やジョン・バージャーの *Into Their Labours: Pig Earth, Once in Europa, Lilac and Flag: A Trilogy* (London: Granta Books, 1992) を参照されたい。

資」という見方とは異なっている。すなわち極端に言えば、「私は自分の事業のために資本を必要としている。私はそれを保有していない。だから私は融資を受けて、事業が成長した時、または利潤を生み出した時、返済を行うだろう」という考え方である。この見方は極めて単純だ。多くの発展途上国で見られるある種の地方経済、すなわちバザー経済について考えてみよう。人類学者のクリフォード・ギーツは伝統的なバザー経済を以下のように述べる。

「複雑で、枝状に分かれたクレジットバランスのネットワーク。そこでは大小を問わず、商人たちが結び付けられている。例えば [インドネシアの] パサールにおいて、このネットワークは初期の統合的な要素を提供しているが、これは商人たちの階級的な順位付けを導くためのものである。すなわち、より大きな商人が小さな商人に融資を提供し、小さな商人は大きな商人に負債を負うのである。これらのクレジットバランスは、その資本が持続的な商売上の関係を多かれ少なかれ構築し安定させるために作られた手段としてのみ見なされるならば、たったの半分しか理解されていない…例えば、商人たちがしばしば安い政府の融資より高価でかつプライベートな融資を好むのは、まさにこれが理由である…資本へのアクセスがシンプルで、取引の流れの中でより高いポジションを保障してくれる¹¹⁾。」

ジョン・メイナード・ケインズは一度こう述べたことがある。「もしあなたが銀行から 100 ポンド借りていたら、あなたは問題を抱える。もしあなたが 100 万ポンド借りていたら、銀行が問題を抱える。」¹²⁾ ポイントは、事業において融資をめぐる関係が複雑になりうることにあり、そのような関係におけるパワーバランスとその他の最適化もしくはポジション“争い”は、初見では容易に理解できない。どうやら、企業を経営するものと貧しいマイクロクレジットの借り手は、二つの異なる存在であるようだ。今日のマイクロファイナンスプログラムの借り手の大部分は多かれ少なかれ単純な行動をとる。すなわち、彼らはローンを返済し、借金から抜け出したいのである。

それとは対照的に、賢い事業主である借り手は可能な限り資金を保有したがらる。今日のマイクロファイナンス計画において、例えばインドで、月の売上が 50 万ルピーになるような好調な巨大大業であってもマイクロファイナンス機関から 2 万ルピーの 12 か月ローンを借りる姿を我々は時折目にすることがある。どう厳しく考えても、この企業には融資が不要で、即座に

11) Clifford Geertz, *Peddlers and Princes* (Chicago: University of Chicago Press, 1963), p.36.

12) 「」は訳者によって追加。

返済することも容易い。しかし、企業は他者との織り合わされた一定の関係を作るための追加の手段としてマイクロクレジットを使っている。投資は、(しばしば間違っはいるものの)何百万ルピーやそれ以上という貸し付けにつながる潜在的な新しい人間関係だと信じられているのである。

ビジネスのためのフォーマルクレジット：経済発展の結果であり原因ではない

フォーマルな貸し付けのお膳立てと、(例えば経済発展のような)貿易と商取引の成長はどちらが先に立つのだろうか？成長が先である、という証拠はたくさんある。中世のベニスにおいて、商売をさらに発展させようとする商人たちの商業活動は初期の形態の個人銀行によって資金を提供されていた。16世紀から17世紀にかけてのインドムガル帝国において、初期の「銀行家」としての役割を果たした人々が属する階層の発生は、商業活動の拡大に導かれたようなものである。それらサラフは融資を提供し、フンディと呼ばれる為替手形を用いながら資金の移動を請け負っていた¹³⁾。初期の形態の多国籍企業であるイギリス東インド会社も、オランダ東インド会社も、サラフを通じて資金を生み出したのである。明らかに、一度ある一定の規模に達すると、フォーマルな融資と経済発展はいくらか結びつくようになる。しかし後に説明するように、事業立ち上げ時の活動に際して資本の共通した源は(現在においても)、事業主自身や家族、友人の保有する貯蓄などなのである。

事実、18世紀の終わりの25年間にイギリスで始まったヨーロッパの産業革命初期において、銀行の役割は重工業と家内制手工業の広がりを一部とする需要に応える形で発展した。重工業には、工業や冶金、機械製造業に用いる短期の資金を提供している。また、永続的な当座貸越を含む様々な金融商品も生まれた¹⁴⁾。歴史の流れは、最初にセクターや活動の盛り立てが起こり、それからフォーマルな事業融資への需要が続いたように見えるのである。

13) Ishrat Alam, "Sarrafis (Bankers) in the Mughal Empire," paper presented at Session 106, 14th International Economic History Congress, Helsinki, 2006.

14) David S. Landes, *The Unbound Prometheus: Technological Change and Industrial Development in Western Europe from 1750 to the Present* (Cambridge: Cambridge University Press, 1969), pp.74-75, 154.

小規模事業の立ち上げには、典型的にインフォーマルな融資のほうが好まれる

1825年、フランス人作家オノレ・ド・バルザックは決意した。彼の本の出版を管理し、売上から利潤を確保する唯一の方法は、印刷と販売を彼自身の手によって行うことである、と考えたのである。彼は初期の形態の「垂直的に統合された」ビジネスを始め、執筆から紙の調達、印刷、広告、マーケティングを統括したが、絶え間ない資金不足のためお金が必要であった。最初は家族や愛人から借入れ、しばらくは上手くいったものの、負債は確実に清算されなければならない。彼の借金6万フランのうち、5万は家族からによるものであった¹⁵⁾。

1923年、まもなくウォルト・ディズニーがハリウッドにやってくる。彼と彼の兄ロイはディズニーブラザーズ（後にディズニースタジオと呼ばれる）を設立するための資金を必要とした。彼らは25ドルをロイの恋人から、そして500ドルを彼らの叔父から借りたのである¹⁶⁾。

自己金融（貯蓄）、または近い社会関係からの借入れは、少なくとも産業革命の初期において、一般的に事業の立ち上げに用いられてきた。フランスの経済学者ポール・ペロックが指摘するように、「産業革命の始まりの段階で自己金融は、事業金融の主流であり、かつ独占的な形態であった¹⁷⁾」。先進国でも発展途上国でも同様に、ノンバンク、すなわち事業立ち上げのための資本の非公的なソースは、今日に至るまで主要な方法であり続けている。グローバルアントレプレナーシップモニターが2000年にアメリカ合衆国や英国、ノルウェー、シンガポール、韓国を含む12の先進国及び高成長国を対象に行った調査によると、平均で78%の新規開業資金がインフォーマルな形で調達されていた¹⁸⁾。

なぜこのようなことが起きているのか、より良い表現をするならば、なぜそれが論理的であるのだろうか？なぜなら、起業とは現場で行われる経験だからである。すなわち、「コントロールされた」条件下での実験室ではなく、現実世界での出来事なのである。従って、結果を前もって予測することはできない。当の起業家を筆頭に、全ての人々が実情を理解しているように見える。すなわち、例えば公的な金融手段が整っていたとしても、人々は自己金融や非公的な金融（またはその両方）を好む、という事実である。友人や親戚からの借金は一部社会的な関係を土台としているため、起業家はその取引量を増やすことができる。なぜならこうした取

15) Honoré de Balzac, *Le Médecin de campagne* (Paris: Editions Gallimad, 1974), preface by Emmanuel Le Roy Ladurie, notes by Patrick Berthier, p.333. を参照。

16) Anthony Lane, "Wonderful World: What Walt Disney Made," *New Yorker*, December 11, 2006, p.69.

17) Paul Bairoch, *Le Tiers-Monde dans l'impasse, Le Démarrage économique de 18ème au 20ème siècle* (Paris: Gallimard, 1992), p.95.

18) Paul D. Rernolds et al., *Global Entrepreneurship Monitor—2000 Executive Report* (Kauffman Center for Entrepreneurial Leadership, Babson College, London Business School and Ernst & Young, 2000), p.29.

り決めは、公的な借り入れよりも“優しく”、“忍耐強く”、リスクに寛容で、利益主導ではない。端的に言ってこれらのローンは広く普及しているが、それは公的な金融手段へのアクセスを欠いているためではなく（例えこの欠如が理由の時であっても）、金融リスクの観点から好ましいためである。友人や親戚は公的な金融機関よりもリスクを取りがちなのである。

事実、博愛的または利他的な動機によって生じた今日のマイクロファイナンスや過去のそうした努力の双方にとって、比較的“簡単”な条件での事業融資へのアクセスが開業時における想定されたリスクに新たな危険性を追加する、という証拠がある。つまり、資金の価値を過小評価し、どのように使われているか注意をしなくなる、という事実につきものの危うさである。19世紀半ばのロンドンとヘンリー・メイヒューのジャーナリズムから顕著な例を見てみよう。彼が日刊紙モーニングクロニクルに掲載した記事は、「貧困層を対象としたローンオフィス」の設置という考えを導き出した。国連マイクロクレジット年が実質的に世界的な「貧困層への融資窓口」を提言した2005年から150年も前の出来事である。メイヒューの「ローンオフィス」の中には、次のような文章がある。

目的は、商取引続行に必要な資材や道具を手に入れるための、分割払いで返済を行う小規模で明白な貸与やローンを達成することにある。事前の総額は僅かで、彼らが受け取るものは少しでしかない。

事前に最も多額のローンを受けとっていたのは、C. アロウェイであった。モーニング・クロニクル紙に掲載された、ナツメグおろしを販売する手足の不自由な商人である彼の描写と痛ましい物語は、路上生活への認識と同情をもたらした。「私はぎょっとして通りを見つめました」。ヘンリーは書く。「そして、状況を正確に写し取ろうと、私の聞こえる範囲で観察を行いました」。9ポンド以上の額が彼に与えられ、返済は週に1シリングであったが、一度に新しい災難に悩まされることになった。彼はロバを購入し、荷馬車を注文した後、金属製品の材料を運んだが、ロバは病気になり、大工はお金と共に姿をくらましてしまった。「ローンオフィス」の最も大掛かりな努力は失敗に終わったように思われる。¹⁹⁾

歴史的に、公的な銀行融資は事業創設時に用いられた。すなわち「巡航速度」の度合いが到達したり、とにかく事業が立ち上げ段階を超えたり、銀行家が信頼することのできる何かを達成したときである。繰り返して言うなら、そこには信用に足る金融的常識があるのであって、

19) E.P. Thompson and Eileen Yeo, *The Unknown Mayhew* (New York : Pantheon Books, 1971), p.43.

貧困層や低所得者の排除に関するバイアスは存在しない。米国に関しては確実に、経済成長の牽引者は企業融資へのアクセスを手にし始めていた貧困層ではなく、大規模な事業と産業の拡大であることはまた明記されるべきであろう²⁰⁾。

今日の標準的なマイクロファイナンスの顧客（その内大多数は起業家ではない）と真に事業を行う者の間に横たわる実質的な線引きは、事業への投資資本と消費の間に存在する。大衆への融資は過去（そして現在でも）において主に消費に関するものであり、または消費そのもののためであった。実際に事業を行うものへの融資は消費のためではなく、また全ての人にアクセス可能である必要もない。

経済史学者達が指摘するように、（スコットランドとスイスのカルバン主義者だけでなく）多くの商人と業者は儉約と禁欲で知られている。彼らは過剰な消費を良しとしなかった（とはいえ一度彼らが真に裕福になればそうしたかもしれない）。現金は蓄積したとき、ビジネスの手段になる。それは、事業家に新たなゲームへの参入を許し、たくさんの異なった取引を可能にするものだ。加えて、貧困層への公的な金融サービスの拡大という最初の試みが、儉約の強い信念に基づいているとしても、貯蓄の結果は事業利用とは関連性を持たないのである。

貧困層に対する初期の公的金融は貯蓄と儉約に基づいていた

英国における18世紀末期の「共済組合」から、1850年にヘルマン・シュルツェ＝デーリチュによって、そして1864年にフリードリッヒ・ライファイゼンによって組織されたドイツの融資組合運動にかけて、さらに、郵便貯金システムにおいて、貧困層を対象とした公的システムの経験は貯蓄に基づいてきた²¹⁾。これらの公的金融サービスの発起人は、スコットランドにおいて貯蓄銀行活動の先駆者であったヘンリー・ダンカンのような人々である。今日、「社会起業家」と呼ばれる彼らは、貧困層への眼差しを持った空想的社会改良家であった。スコットランドにおいてダンカンと彼の仲間達は次のような言葉を用いて彼らの懸念事項を明らかにした。すなわち、「酒場での放蕩…、後先を考えない消費…、労働者階級の軽率さ」そして

20) 今日のアメリカにおいて小規模事業の立ち上げ・事業資金と消費者信用の間には興味深い線引きがある。それはクレジットカードを用いた事業のための高利率資金注入がしばしば1万ドルや2万ドルといった最大限度額まで使いきられたかどうかによる。クレジットカード会社はこの手段が事業資金には適さないことを積極的に訴え、習慣をやめさせようとしている。

21) より詳しい情報については、Hans-Dieter Seibel, "Does History Matter? The Old and the New World of Microfinance in Europe and Asia," paper presented at "From Moneylenders to Microfinance," an interdisciplinary workshop, Asia Research Institute, National University of Singapore, October 7-8, 2005 を参照。

「道徳的抑制」の必要性である²²⁾。

そこには保険の計画や共済組合（主に疾病手当に用いられた）、1810年代にスコットランドで始まった小口貯蓄銀行運動もあったし、それらのいくつかには矯風を土台としたものもあった。ヘイソーンズウェイトが書き残したように、「スコットランドには当時、将来への備えや自制を習慣とする人々のトレーニングの手段として小口貯蓄銀行や共済組合を用いる傾向」があったのである²³⁾。

初期の金融システムにおける「節約」という言葉はまさに、貯蓄の道徳的土台を捉えている。アメリカ合衆国において、ベンジャミン・フランクリンの「プーア・リチャードの暦（貯蓄された一ペニーは儲けた一ペニーである）」の人気と1973年の大きなペニー銅貨の印圧加工は、金属製（そして後に機械製の）貯金箱（豚型貯金箱として知られる）という流行を作り出した。

1849年10月から1850年12月の間、ロンドンモーニングクロニクルに掲載されたヘンリー・メイヒューの82の投書は、19世紀の英国の貧困における、最も洞察の深い調査であると考えられる。それらは、常時の金銭保有が可能だったわけでもないという事実に関らず、働く貧困層が様々な貯蓄メカニズムを用いていたことをはっきりと示している。

ある仕立て屋の証言：

「私が安い展示販売店で働き始めたとき、小口銀行には5ポンド10セントありました。今は半ペニーも持っていません。私が貯蓄していた全ては、私や私の家族の生活を保つため少しずつ出ていってしまいました。」²⁴⁾

あるブーツ職人の証言：

「私は長い間”Four per Cents”に100ポンド持っていましたし（後に友人に貸しましたが）、40ポンドから50ポンドを貯蓄銀行においていました。」²⁵⁾

22) Timothy Alborn, “The Thrift Wars: Savings Banks and Life Assurance in Victorian Britain,” unpublished paper, New York, Lejman Collage, City University of New York, n. d.

23) J. A. Haythornthwaite, *Scotland in the Nineteenth Century, An Analytical Bibliography of Material Relation to Scotland in Parliamentary Papers, 1800-1900* (Aldershot, UK: Scolar Press, 1993), p.114.

24) Thompson and Yeo, p. 222.

25) Ibid., p.241. “Four-per-Cents”は17世紀より前に英国で使われた政府の債務証券で、米国においても使用された。貧困層にさほど使われたようには見えないものの、英国のある「労働者階級」は明らかに利用している。

19 世紀において、貧困層向け葬祭共済組合や住宅金融組合、生活協同組合、小口貯蓄銀行、郵便貯金等といった豊富な金融システムからの現金引き出しは、急な怪我や病気、葬祭、土地の一画、退職、結婚式に関する支出などのためであった。これらは今日、貧しい国の人々が現金を必要とする理由と類似している。しかし、これらのローンが起業家精神のあふれる形として用いられたという示唆は、何れの文献にも見ることができない²⁶⁾。

もちろん、メイヒューのもう一つのレポートで例示されているように、質屋の存在もあった。

ペンキ工の妻の証言：

「『私は今朝一枚のお皿を売るように命じられました、旦那さん。』女性はやった。『食事はパンのみで、今日の私達の分です。そして、どうやってもう一塊のパンを得ることができるのか、私にはわかりません』」²⁷⁾

貧困層が浅慮であるかどうかについては、この論文では取り上げることはしない。問題なのは、貯蓄銀行やその他の公的貯蓄金融サービス提供機関がしばしば貧困層に貯蓄の価値について教える必要があるように感じていたという事実である。さらに重要なことに、これらの授業の対象であった貧困層は「働く貧困層」であったが、彼らは「雨の日」に備えてその所得のいくばくかを貯蓄する手段を必要としていた（あるいはそう言った手段を必要としていたと他者は考えていた）。初期のシステムもまた、健康と生命双方における保険プログラムを設けていたことは意味ありげである。ここで再び、順序が教訓的な意味を帯びる。すなわち、最近のマイクロファイナンス活動以来、全てのことは逆に既に行われていたのである。マイクロファイナンス活動はもっぱら融資とともに始まった。貯蓄が議題に挙がったのはかなり遅くなってからで（それも常に熱心に、というわけでもなく）、そしてようやく今私達は、保険のような他のサービスについての話題を聞くようになり始めたばかりである。

貧困層による公的融資へのアクセスは貯蓄の後に来るものであり、また消費を目的としている。

我々が貯蓄と融資を混同して考え始めるようになったのは、実は 20 世紀の初めからではな

26) P. H. J. H. Gosden, *Self-Help: Voluntary Associations in 19th Century Britain* (New York : Barnes and Nobel, 1974)

27) Thompson and Yeo, p. 261.

い。例えば、カナダの政治家であり事業家であったアルフォンス・デジャルダン²⁸⁾は1901年、ケベック州レヴィにドイツの信用組合を輸入し、ケース・ポピュレール（庶民金庫）を設立した。フランス系カナダ人をニューイングランドに定着させる思惑もあって、デジャルダンは1909年ニューハンプシャーにもそのモデルを導入している。これはアメリカで行われた初めての信用組合であった。1925年までに、26の州で信用組合に関する法整備を整えている²⁸⁾。

大衆の公的金融へのアクセスが現れたのは、消費のためであった。最初の「モーリスプラン貯蓄金融組合」がアメリカで誕生したのは1910年のことである。モーリスプラン銀行はおそらく、最初であり真のマイクロクレジットの先駆けであった。なぜなら、それらは低所得者や中所得者を対象にしたもので、かつ、貸金業者や高利貸しの力を減らすよう設計されていたためである。さらに、彼らは連帯責任の概念も用いていた。ローン希望者は担保を用意する必要はないが、彼を知る二人の連帯保証人が必要で、その二人も彼と似たような経済力を持っていないなければならない（例えば同じ経済クラスに属するなど）。しかし、保証人は希望者のローンではなく、むしろ彼の人格を保証していた。これによって「情報の非対称性」を解決し、取引費用は削減されたのである。重要なことに、ほとんど全ての借り手が被雇用者で、1910年のアメリカ社会は著しく工業化されていた。1931年までにモーリスプラン貸付組織が存在する都市の数は142に、年間貸付総額は2億2,000万ドルに上る²⁹⁾。再度確認をするならば、順番は以下の通りに見える。すなわち、最初に経済成長があり、次に貧困層による公的な貯蓄機関への到達、そして最後に消費のための幅広いアクセス、なのである。

モーリスプランの関連組織は主に消費「ニーズ」と結びついていて、当時の経済発展という観点から見られる必要がある。19世紀の終わりまでは、工業部門での労働者数の増加はあれども米国の大半の人々は農業従事者であった。そこには感知できるほどの「中産階級」は存在せず、農民や商人、貿易業者や労働者、そして富裕層（ますます富を大きな事業から導き出した人々）がいるのみであった。

農民達は、現金の観点からは貧しく、しばしば彼らは供給者との掛け売りを通して資材などを手に入れ、賃金労働者達も同様の形で資金の流れを管理していた（例えば、地域の日用品販売店での「ツケ」の累積など）。取引の大半の部分は、未だに物々交換の形を取っていた。公的な融資機関を推し進めたのは、成長する工業の生産性と技術的発明のコンビネーションであ

28) 今日、米国には8,853の信用組合があり、そのメンバー数は8,700万人以上、預金は7,000億ドルに上る。(New York State Credit Union League and Affiliates : <http://www.nyscua.org/News/factsheet.htm>.)

29) Ronnie J. Phillips and David Mushinski, "The Role of Morris Plan Lending Institutions in Expanding Consumer Micro Credit in the United States," research paper, Colorado State University, March 2001.

り、また、人々に「一般人」のニーズに注目させたセオドア・ルーズベルトの進歩主義運動も同様であった。それは20世紀の最初の20年間のことで、「一般人」の信用へのアクセスに関する民主化における全ての公的革新が起きたのである。それらの中には、融資組合やモーリス式銀行、消費のための分割払いなどが含まれていた。

しかし、「一般人」は小さな事業を始めることを期待されていたわけではない。もし彼が農民でなければ、賃金のために働くことを求められ、実際そうしたし、彼が絶対に「必要」としているわけではない消費財を購入するためにお金を借りることを期待された。要するに大衆金融が意図している「一般人」とは、賃金労働の台頭の産物であり、真実、経済成長における西側諸国の形態である工業化の最初の成果なのであった。彼の役割は経済成長の直接的な生産者ではなく、その果実の消費者だったのである。

1920年代の終わりに、フーヴァー大統領が設置した「最新経済変動委員会」は1929年に次のような報告を行っている。

「我々は食料供給に関する恐れを失って久しく、もはや食料を贅沢品として見なすことはない。我々の欲求はより幅広く、広範な財とサービスのリストを欲しており、それは『選択の自由な購入』という分類の下からやってくる。」³⁰⁾

さらに経済史学者マーティン・スクラーは次のように指摘した。

「財とサービスへの飽くなき欲求は、しかしながら効果的な消費購買力となるだろう。それらは満足に対するしぶとい不足を証明したし、とにかく、生産能力は実在する市場の需要をひたすらに凌いだのである。」³¹⁾

スクラーは、分割払いや他の消費者信用が、1920年代にアメリカの労働者階級または低所得者たちに新しい財の購入を可能にするために登場した、と信じる人物である。そして彼の信念は、今日、メキシコのエレクトラストアによって実証された。小売りと銀行業の熱烈な結婚である。エレクトラは既に自店舗内にアステカ銀行の支店を設け、より多額の買い物を貧困層に可能にしている。そのシステムは貯蓄口座の推進に基づいており、同時に、借り手の生活水準

30) Martin J Sklar, *The United States as a Developing Country* (Cambridge University Press, 1992), p. 166. より引用。

31) Ibid.

が彼らのローンの申込用紙に書かれたものと合致するかどうかを家庭訪問する査察官たちの中核も担う。ウォールマートメキシコも同様のシステムについて検討中である³²⁾。

非公的なクレジットシステムは複雑で、消費のために作られた

消費の増加との関係の中で発展した（そして比較的歴史上最近）の公的な融資システムとは対照的に、非公的な金融システムは恐らくお金の使用の黎明期に、そしてそこに食糧不足や危機があったかどうかにかかわらず。こうしたシステムは、そこに行政の提供するセーフティネットやリスク緩和システムが不足している時に「なんとかやりくりする」ためのものであった。貧しい人々は他に頼るものがなく、医療やその他の危機に出会った時に採るべき手段を持たない。男性が僅かな稼ぎをアルコールやギャンブルに変えてしまうような、隠れた、よしんば目に見えていたとしても慢性的な問題は、今日の発展途上国で広く見られるものであり、多くのマイクロクレジット計画で女性への貸し付けを主張する理由の背景でもある。従って、最近の貧困国と同様に稼いだお金が激減したり空の状態で届く世帯では、「キャッシュフロー危機」は毎週起こりえた。

様々な形態の相互扶助は英国においても早くから存在し、人々は通常（比較的主に）一括払いやキャッシュフロー目的など必要に応じてそれらに加盟したり脱退したりしていた。ここで再度、19世紀半ばのロンドンの、低所得労働者に対するメイヒューのインタビューを振り返ろう。この時期ブーツ職人の所得は、フランスからの革製品の輸入増加によって打撃を受けていた。

「旦那さん、もしこんなやり方でいくというのなら、なぜ救貧院は私たちの顔をじろじろ見るのですか。しかし私達の意図は、この冬、クラブ（回転式貯蓄信用講や今日におけるマイクロファイナンスの業界用語、ROSCA³³⁾）に参加して、アメリカ移住の資金にすることです。」³⁴⁾

イギリスの労働者階級にとって、20世紀の最初の10年間には素晴しく多様な非公的信用オプションが存在した。1930年代まで遡って再収集されたベルファストの、労働者を含む近年のオーラルヒストリープロジェクトは印象的である。

32) "Underwear and overdrafts," *The Economist*, November 25, 2006, p. 102.

33) 訳者注。Rotating Saving and Credit Associationの略。頼母子講のようなもの。

34) Thompson and Yeo, p. 240.

「歴史的に大半の労働者階級の家族は、信用貸し付け提供者リストの一つかそれ以上を熟知していて、それらの中には、小さな商店での『掛け売り』（アメリカでは『つけ』）、掛け売りでの呉服商、質屋、計数係、請求書取引業者、通信販売業者、近所の金貸し、そして分割払い購入（月賦）を行う商人が含まれる。」³⁵⁾

さらに、信用戦略は等しく多様で多角的であった。根拠のない信用取引は好まれた。第二次世界大戦後のベルファストにおいて、信用組合の融資上限額が生じたとき、人々は未だに貸金業者を最後の手段としていた。そして友人や知り合い、親戚のネットワーク間での戦略は、彼らの意欲の中で革新的なだけでなく、複雑でもあった。利他的行為と社会的なつながり、そして同時に利潤最大化と利己心に全てが含まれていた。オコーネルはベルファストでコミュニティメンバーが生協売店に所属する理由を、つけがきき、配当日（co-quarter と呼ばれた）までに借金の全額が支払われる以上、四半期ごとに配当金を受け取ることができるため、だと説明した。そこには、友人や近所、そして親戚へ生協の会員本を貸し出す習慣があり、人々は生協から掛け売りで物を買ひ、期日が来るまでに本の持ち主に返済をした。このように、本の持ち主は増加する購入量のおかげでより多くの配当金を受け取ることができたとし、それは実際本の貸し出しに対する利子のようなものだと言えた。

非公的な信用制度はジェンダーに特有のものでもあった。（近所や通りの住人を基本とする）女性のためのシステムも存在したし、男性向けの非公式信用制度は特定の職場を土台としていた。それらは事実上、経済的かつ（今日でいうところの）「社会資本的」機能双方の提携による共通債であった。

しかし再度振り返るに、公的な信用制度と同様、消費者信用にアクセスを持つ全ての「一般人」は、儉約家や賃金所得者であったり、またその両方であったりした。彼らは小規模企業家ではなく、彼らの信用を労働の資本や事業立ち上げに使ったりはしなかった。信用取引の増加は消費の促進や円滑化のためにやってきたのである。

今日の米国：民主化された信用取引は未だに消費のために使われている

米国の連邦準備制度は、1943年の2月から自国における未払いの消費者信用に関するデータを維持しており、その時点で総額 65 億 7,700 万ドルであった。それらはもっぱらノンリボルビ

35) Sean O'Connell, "Credit Class and Community: Working Class Belfast 1930-2000," research paper, University of Ulster, UK, School of History and International Affairs, 2004, p. 8.

ング信用（自動車ローンや分割支払い方式）で、抵当を含まない額である。クレジットカードは1960年代まで広く使われておらず、連邦準備制度が、（リボルビングクレジットの項目の下で）その総額が13億1,600万ドルであった1968年の1月までクレジットカードによる負債を記録していなかった、という事実を反映している。2006年6月までに、その額は600倍以上増加して8,206億5,000万ドルになった。また消費者クレジットは1995年1月の1兆ドルを超え、2006年6月には2兆1,860億ドルに膨れ上がった³⁶⁾。

2006年の半ばまでに、およそ12億枚のクレジットカードがアメリカの消費者の手に渡ったが、これは（女性、男性、そして子どもも含む）一人が4枚のカードを所有していたに等しい。より大きな信用取引の民主化を想像することは難しいが、これが主に消費者信用によるものだと認めることは重要だ。そして、この安易な「全ての人に信用取引を」運動の結果、およそ半分のクレジットカード保有者が毎月利用残高を完済せず、従って終わりの無い債務の中にいる（ここでは、もし”PAR-30: Portfolio-at-Risk over 30 days in arrears”を用いた銀行のリスク評価手段が適応されれば、このような状況がどう見えるかについては論じない）。

最後に、アメリカの貯蓄率は2005年半ば0%に到達したが、これは大恐慌の真っ最中であった1933年以降最も低い数字である。この出来事の長期間にわたる結果が未だに知られていないにも関わらず（米国はせいぜいなんとか二世代が過ぎただけである）、ある人々は肯定的にも否定的にも、容易な消費者信用と低い貯蓄率によるマイナスの経済的、そして社会的な予期せぬ問題を予測している。確かにこんな事態は、ムハマド・ユヌスが信用取引は人権であると言った時に心に描いたものではない。

まとめ

歴史は、信用や貯蓄サービスとそれらの開発における役割はそれほど変化していないことを私たちに伝えている。過去（と現在）において平均的な貧困層の人々は起業家ではなく、彼もしくは彼女が信用取引へのアクセスを手に入れたとき、それは消費かキャッシュフローの円滑化のためであった。平均的な起業家は公的な信用取引よりも非公式の信用や貯蓄での起業を好む。貧困層や低所得者層にとって最も好ましいのは貯蓄を土台としたサービスであり、外部からの、ついでに言えば進化する大きなマイクロファイナンスからの経済的な助けを必要としない、純粋な形の中にあるのである。

36) U.S. Federal Reserve Board, <http://www.federalreserve.gov/release/g19/Current/> を参照。（現在のページは削除済み）。

事実、今日のマイクロファイナンスの世界において、貯蓄がマイクロファイナンス機関(MFT's)の健全さの根底にあることはますます理解されるようになっている。

「貯蓄を好む MFIs は、投資のサイクルがメンバーの貯蓄からすべて賄われる時、自立のラインにさらに確実に、そして最後にはより急速に到達するのだと主張する。」³⁷⁾

インドネシア庶民銀行のユニットデサシステムは、金融的な土台に外部の財源をほとんど用いなかった主要なマイクロファイナンスの成功の良い例である。他にも、あまり知られてはいないが、インドの Community Development Foundation のように、マイクロファイナンス業界から援助を受けとらずにメンバーの「儉約社会」で成り立つ組織も存在する。

最も重要なことに、経済成長とその結果である大幅な貧困削減は、貧困層に所得創出や資産購入を容易にするために作られたマイクロファイナンスに依存しなかった、と歴史は伝えている。そのかわり、職を作りだし、徐々に低所得労働者を金融サービスの魅力的な対象にすることが開発のプロセスであった。それは貯蓄からスタートし、生産された財が幅広い市場を持つために消費へと移行するためのものだったのである。

全く同じ言葉が今日の違う世界に適応される必要はなく、ある重要な要素は劇的に変化している（例えば科学技術と機械化は最貧国にあっても労働集約性を必ず減少させるだろう）ものの、開発の根本的なダイナミクスが既にあてはまらないと考える強制的な理由はない。今は亡き英国の開発経済学者ピーター・パウアーが言ったように、「お金を持つことは経済的達成の結果であり、その前提条件ではない³⁸⁾」のである。

資本はまったく、特にその貸出において、多くのマイクロファイナンスそのものである。そしてマイクロファイナンス活動のただ中にいる我々は確かに、開発の前提条件であると仮定していた。もしそうでないなら、そして、歴史が同じことを強く提言するなら、私達はマイクロファイナンスへの期待を根本的に減らし、現実と向き合う必要がある。

37) Jacques B. Gélinas, *Freedom from Debt: The Reappropriation of Development through Financial Self-reliance* (London: Zed Books, 1998), p. 120.

38) Peter Bauer, *From Subsistence to Exchange and Other Essays* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2000), p. 6.

解題

筆者であるトーマス・ディヒターは、国連開発計画や世界銀行、アジア開発銀行や米国国際開発局などと共に、40年以上に亘って約50の国々で開発計画に従事してきた。同時にマイクロファイナンス（Microfinance：以下 MF）事業にも30年近く関わっている。その豊富な経験の下で MF の問題点についていち早く気づき、危機感を抱いたのであろう。2007年には共同編集者らと”What’s Wrong with Microfinance（未訳）”を発行し、MFの急速な広まりに一石を投じた。これは、グラミン銀行とその創設者ムハマド・ユヌス氏がノーベル平和賞を受賞した翌年のことである。本稿は、その編著書と年を同じくして、米国のシンクタンクであるケイトー研究所で発表された。

本稿の中でディヒターは北側諸国の金融の歴史を振り返り、MFが前提としてきた暗黙の過程について批判する。例えば、貧困層は資産を隠しているだけである、という指摘は、ユヌス氏がグラミンバンクを設立するきっかけとなったジョブラ村でのある女性との出会いを想起させる。有名なあのエピソードによれば、その女性は仲買人に原材料費を払うだけの余裕の無さから製品の買い取り価格を低く抑えられており、ユヌス氏が少額を貸し付けることで利益を上げながらも完済を可能にした。またディヒターは貧しい人々が全て起業家精神の持ち主ではないことも指摘する。「貧しい人々はそれまでどうにか生計を営んできたのだから、機会さえあればそこから利益を得ることは可能である」というユヌス氏の信念とは正反対である。さらに公的な貸し付けが経済発展の結果であるという指摘の裏には、途上国での MF の円滑な運用における疑問が隠れている。すなわち、経済活動が停滞した農村社会に強制的に資金を注入したとして、それが有効に機能しうるのかという問いかけである。加えてそのインフォーマルな貸し付けも、ディヒターによれば、自身による貯蓄や、親類縁者や友人をリソースとしており、公的貸付よりも好まれる資金獲得手段であった。またディヒターは、貧困層が最初に手にした公的金融は、まず儉約や節制を基にした貯蓄であったとも、それらが貧困層に消費を促進するためのものであったとも述べる。インフォーマルな貸し付けも同じ目的を抱えており、そのために貧困層の人々はシステムを複雑に運用しながらその日を凌いでいた。すなわち、金融の歴史を振り返るに、MFの誕生は極めて不自然で、それゆえ貧困層の生活に何ら正の影響をもたらすようには見えない、というのがディヒターの主張である。そして最後にディヒターは現在の米国を例に挙げ、貧困層と金融サービスの関係は時代が進んでも変容はしないと述べる。例え現代の先進国にあっても、公的金融が誘引するのは投資ではなく消費行動なのである。従って MF は、今までも、そしてこれからも、事業融資に使われることはなく、貧困層の所得向上

にも寄与しうるとは考えにくい、というのが本稿におけるディヒターの結論である。

本稿の出版から3年後、インドのアンドラプラデシュ州においてMF利用者の自殺が報じられた。この事件をきっかけにMFへの批判は一時的に強まりを見せたものの、インド政府による利子率上限規制や債務者保護の動きもあって、現在では沈静化している。しかし、これまでMFが貧困層に「融資という人権」を与えるものだと思っていた人々にとって、その神話を見直すきっかけとなったことは間違いない。

本稿は、北側諸国における金融の歴史からMFを批判した。従ってここには、実際にMFを用いて貧困に陥った人々の例も、そのメカニズムも、理論的根拠も一つとして示されない。そのため我々は、ディヒターの言葉を借りて、「北側諸国の経験してきた開発の根本的なダイナミクスが今でもあてはまると考える強制的な理由もない」、と反論することができる。しかし、それはただの言葉遊びに過ぎないだろう。最大の問題は、本稿の出版から9年経ってなお、ディヒターの言葉を完全に否定するだけの強力な材料を我々が持っていないことにある。

MFは長い間、礼賛され続けてきた。農村に資本主義を導入することで、貧しい人々を貧困から助け出し、女性をエンパワーし、しかも極めて高い持続可能性を持つ、理想の開発手段であるとみなされていた。しかし本当にそうだったのだろうか。我々は一部の「成功例」に気を取られ、脱落したり未だ貧困状態にある借り手から目を背けてこなかっただろうか。全てのMF利用者に焦点を当て、その状況を把握することは容易ではない。しかしインドの事件を繰り返さないためにも、そしてその貧困削減効果をさらに普遍的で強固なものにするためにも、借り手の状況に理解を深めなければならない。そうして初めて、我々はMFを再考することができるのである。

参考文献

- Alborn, T. "The Thrift Wars: Savings Banks and Life Assurance in Victorian Britain," unpublished paper, New York, Lejman Collage, City University of New York, n. d.
- Bauer, P. 2000. *From Subsistence to Exchange and Other Essays*. Princeton University Press.
- Berger, J. 1992. *Into Their Labours: Pig Earth, Once in Europa, Lilac and Flag: A Trilogy*. Granta Books.
- Chayanov A. V. 1986. "The Theory of Peasant Economy." University of Wisconsin Press.
- Clifford G. 1963. *Peddlers and Princes*. University of Chicago Press.
- De Soto, H. 2000. *The Mystery of Capital: Why Capitalism Triumphs in the West and Fails Everywhere Else*, Basic Books.

- Gélinas, J B. 1998. *Freedom from Debt: The Reappropriation of Development through Financial Self-reliance*. Zed Books.
- Gosden, P. H. J. H. 1974. *Self-Help: Voluntary Associations in 19th Century Britain*. Barnes and Nobel.
- Helms, B. 2006a. "Key Principles of Microfinance" *Access for All, Building Inclusive Financial Systems*, Consultative Group to Assist the Poor, p.xi.
- Helms, B. 2006b, "The Consultative Group to Assist the Poor" *Access for All, Building Inclusive Financial Systems*, Consultative Group to Assist the Poor, p.ix.
- Haythornthwaite, J A. 1993. *Scotland in the Nineteenth Century, An Analytical Bibliography of Material Relation to Scotland in Parliamentary Papers, 1800-1900*. Scolar Press..
- Ishrat Alam. 2006. "Sarrafis (Bankers) in the Mughal Empire," paper presented at Session 106, 14th International Economic History Congress, Helsinki.
- Landes, D S. 1969. *The Unbound Prometheus: Technological Change and Industrial Development in Western Europe from 1750 to the Present*. Cambridge University Press
- Lane, A. 2006. *Wonderful World : What Walt Disney Made*. New Yorker, December 11..
- O'Connell, S. 2004. "Credit Class and Community: Working Class Belfast 1930-2000," research paper, University of Ulster, UK, School of History and International Affairs.
- Phillips R J and Mushinski, D. 2001. "The Role of Morris Plan Lending Institutions in Expanding Consumer Micro Credit in the United States," research paper, Colorado State University, March.
- Rernolds, P D. Hay, M. Bygrave, W D, Camp, S M and Autio E. 2000. "What makes a Country Entrepreneurial?" *Global Entrepreneurship Monitor — 2000 Executive Report*. Kauffman Center for Entrepreneurial Leadership, pp. 17-30.
- Seibel, H D. 2005. "Does History Matter? The Old and the New World of Microfinance in Europe and Asia," paper presented at "From Moneylenders to Microfinance," an interdisciplinary workshop, Asia Research Institute, National University of Singapore, October 7-8.
- Sklar, M J. 1992. *The United States as a Developing Country*. Cambridge University Press.
- The Economist. 2006. "Underwear and overdrafts," *The Economist*. November 25.
- Thompson, E P and Yeo, E. 1971. *The Unknown Mayhew*. Pantheon Books.
- Bairoch, P. 1992. *Le Tiers-Monde dans l'impasse, Le Demarrage economique de 18eme au 20eme siècle*. Gallimard..

De Balzac, H. 1974. *Le Médecine de campagne* . Gallimad.

Baum, L. “The Year of Microcredit” *Human News*. September 29, 2005,

<http://ideaexplore.net/news/050929.html>. (February 23, 2016)

Board of Governors of the Federal Reserve System. <http://www.federalreserve.gov/release/g19/Current/>.

International Year of Microcredit 2005, “Who’s involved-Patrons Group”

http://www.yearofmicrocredit.org/pages/whosinvolved/whosinvolved_patronsgroup_portman.asp.

(February 23, 2016)

Microcredit Summit Campaign, <http://microcreditsummit.org>. (February 23, 2016)

Muhammad Yunus. 2006. “What is Microcredit?” August.

<http://www.grameen-info.org/bank/WhatisMicrocredit.html>. (現在このページは削除済み)

New York State Credit Union League and Affiliates. <http://www.nyscua.org/News/factsheet.htm>.

(現在このページは削除済み)

United nations Department of Economic and Social Affairs, <http://www.un.org/esa/>. (February 24, 2016)